

## JOMF 派遣医師便り (2015. 4)

### ◆シンガポール◆

### リー・クアンユー氏と肺炎

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

先月 23 日午前 3 時 18 分、シンガポールの建国の父と称されるリー・クアンユー氏が亡くなりました。91 歳でした。死因は肺炎とのこと。細菌性かウイルス性かそれとも何らかの別の肺炎かは、今もって公にはされはませんが、重症の肺炎で、機械的補助装置で呼吸をサポートしていたという報道がされていました。シンガポールで最大(ベッド数 1500 床以上)で、歴史が最も長い(1821 年の創立) Singapore General Hospital に入院したのは 2 月 5 日でしたが、そのまま退院することなく、3 月 23 日に帰らぬ人となりました。

最善、最大限の治療をされたに相違ないのですが、それも及ばず、リー氏の命を奪ったのが肺炎です。肺炎についてシンガポールの統計を見ますと肺炎はがんについて死因の 2 番目にランクされています。入院の理由としても 5 番目です。

日本では全死亡者の中では死因の 4 番目なのですが、5 歳から 64 歳までは 5 位までには入っていません。そして、65-84 歳までは死因の 4 位、85-89 歳で 3 位、90-99 歳で 2 位、100 歳以上では 3 位となります。男性の場合に限ると、90 歳以上で 1 位です。(ちなみに全死亡者で 100 歳以上の死因の 1 位は老衰です。)

日本の過去の統計を振り返ってみますと、戦後間もない昭和 20 年代前半、死因の多くは感染症で肺炎は 2 位、3 位でしたが、その後の栄養状態の改善、医療の進歩などで 5 位ぐらいにまで後退しました。その後、1980 年以後は長らく 4 位でしたが、2011 年から 3 位になっています。人口 10 万対の死亡数でも 1980 年の 33.7 から近年には 90 程度となるなど増加が見られています。これは、人口構成が変化し、もともと肺炎で亡くなる割合が高かった高齢者自体の人口が増えたことによる影響が大きいと思われます。

このように抗生剤の開発その他の医療技術が進んだ現在でも、高齢の方では、肺炎で命を落とされる事例が減っていません。そして、リー・クアンユー氏もその一人となったのです。

悪性新生物(がん)も若年者よりも高齢者で多い傾向にあります。共通することは免疫力の低下です。こう考えますと加齢に伴う免疫力の低下は、いかんともしがたいものがあるように思えます。

近頃、肺炎球菌ワクチンの効果についての報告がありました。接種後4年間では高齢者の肺炎の発症を半分程度に減らすことができたということです。ワクチンは免疫系を刺激することによって恣意的に免疫を付けさせる方法です。ワクチンで免疫は付与されるものの、本当に欲しいのは、本来の免疫機能全体が若年者と同じようなレベルで維持されることでしょう。人はいつかは死を迎えるわけではありますが、免疫機能が維持されれば、健康が維持されることに大いに寄与し、(おそらくアンチエイジングにもなり)、社会活動にも参加し続けていけることになるからです。

実際にはそれはとても難しいことかと思いますが、アンチエイジングの研究も近年盛んですので、様々な研究の成果が、健康寿命を延ばすことにつながっていけば社会全体の構造が変わっていくのではないかと思います。

リー氏は1990年に67歳で首相の座は降りましたが、その後も、国会議員選挙に立候補し続け、約60年間にわたり、当選し続け、88歳で引退するまで、国会議員、顧問相として精力的な活動を続けました。また、入院する前日まで、家庭教師による中国語の勉強(リー氏の母語は英語です)を続けていらっしまったことも伝えられています。免疫力にも恵まれた方であったと同時に、それを生かし、またはそれがあからこそ前向きな姿勢を維持し続けた、続けられたということかもしれません。

また、リー氏は、延命治療は希望しないという書類にサインしていたそうです。晩年、精力的な活動続けながらも、同時に徐々に引退の準備をしていき、最後は、自然の摂理に従うという意味を示されていたということかと思いますが、御冥福をお祈り申し上げます。